

ケンムンの森

鹿児島県立喜界高等学校 三年 酒井 亮太郎

暖かな陽光が降り注ぐ奄美大島の森の中を一人の少女が歩いていった。大事そうに一眼レフカメラを抱え、慎重な足取りでゆっくりと森の中を進んでいく。時折立ち止まっては、カメラを構えて写真を撮るが、彼女の顔は曇っていた。

どこを撮っても、フレームの中に空き缶やペットボトルが写り込む。きれいな花のすぐ傍らには盗掘の跡までもが。

「はあ……良い写真が撮れないな」
そう呟き、彼女は一步前へと踏み出した。その瞬間、がらがらと音を立てて足下が崩れた。少女の瘦身が宙に浮かぶ。彼女は悲鳴を上げる間もなく、崖下へと落ちていった。

どれくらいの時が流れただろうか。負傷していたものの、少女は生きていた。彼女はその目をゆっくりと開ける。未だに思考は鈍く、視界は薄ぼんやりとしていたが、状況を確認するにはそれで十分だった。少女はゆっくりと辺りを見回した。どうやら彼女は広大な森の中へ迷い込んだようである。遠くでルリカケスの鳴き声が聞こえる。

彼女は痛む右足を見た。そして唸る。彼女の右足には痛々しい裂傷が生じていた。

「私って運がないな……」

少女が目尻に涙を浮かべたその時、その視界の片隅に何かが入り込んだ。それは赤い毛をした猿のような生物だった。背丈は小学校高学年くらいだろうか。ひょうたんを担いだその生物は、ボサボサに伸び放題な赤髪を掻きながら、緩やかに少女へと近づいてくる。その様子を少女は口をあんどりと開けたまま眺めていた。

すると、生物は青空を思わせる青い瞳で少女をじつと見据えた。そして口を開く。

「へい、お嬢さん。そんなところで寝ていると風邪ひくぜ！」

陽気な中年男性を連想させる声色だった。

「あ、あなたは？」

「俺か？俺はケンムンだ」

「ケンムン？」

予想外のフレーズに少女は困惑した。ケンムンは至って快活である。

「こいつは酷い傷だ。自力では動けなさそうだね。どうだい、お嬢さん。俺はしばらく何の用事もない。つまらない話で良いなら、話し相手になって上げよ

うか？」

ケンムンは満面の笑みを浮かべた。

「私、ケンムンが本当にいるなんて思わなかった。てつきり、架空の存在なんだって思ってた。」

少女の眩きに、ケンムンが愉快げに笑う。

「世界は広いんだ。目に映るものだけが真実とは限らない。もつと研鑽を積むことだね。」

そう言い、ケンムンは酒をあおる。のどが渴いている少女は、その様を恨めしげに見ていた。

「ところで、君はどうして森に入ったんだ？」

「私、カメラで写真を撮るのが好きなの。今度コンテストがあるの」

「カメラ？」

ケンムンが訝しげに問う。少女は手にしていた一眼レフカメラをケンムンへと差し出した。ケンムンはそれを恐る恐る受け取る。慎重な手つきでカメラを触っている。

「はあ、人間は奇妙なものを作るなあ」

そう呟いた瞬間、カメラが光った。ケンムンは泡を食って地面に倒れた。

「何だこれは？びっくりしたじゃないか！」

少女はニヤリと笑うと、カメラの液晶モニターをケンムンへ向けた。

そこには目を見開き、素っ頓狂な顔をしているケンムンがいた。ケンムンは、写真の中の自分自身と同じように目を見開き驚いている。

「これがカメラよ」

「そうか……すばらしい道具だな」

ケンムンが呟いた。しばらくの間、ケンムンは写真をじっと眺めていた。

「なあ、君に見せたいものがあるんだ。ちよつと一緒に付いてきてくれないか？」

少女は頷いた。すると、ケンムンはいきなり少女を抱き上げる。次の瞬間、ケンムンが跳躍する。その赤い体躯が宙高く舞い上がる。少女は悲鳴を上げながら、ケンムンにしがみついた。

五分ほど経過し、ようやくケンムンは目的地に着いたようである。目を回し、疲れ果てた様子の少女を地面に下ろしている。

「うう、気持ち悪い」

「大丈夫かい？」

彼女はゆっくりと立ち上がり、ケンムンに訊ねる。

「それで、私に見せたいものって？」

「これだよ」

ケンムンが指差す。彼が指し示すものを見て、少女は声を上げた。

それは二階建てのビルとほぼ同等の大きさの、巨大なガジュマルだった。幹もかなり太い。

天高く伸びるガジュマルを見て、少女はただただ圧倒されていた。大樹の枝葉を縫うように、陽光が地面を照らしている。光に包まれ、樹全体が淡い光を纏っていた。風に吹かれて枝葉が緩やかに揺れている。

その神秘的な光景を見て、少女は自然とカメラを構えていた。シャッター音が静寂に響く。幻想的な大樹がそこにはあった。

「これがな……」

ケンムンが呟いた。彼はどこか寂しげな、それでいて誇らしげな面持ちで再び呟いた。

「この光景がな、百年先まで残っていてほしいと……」

……俺はいつも思うんだ……」

少女は頷き、再びガジュマルへと目を向けた。しばらくの間、二人は黙って大樹を眺めていた。

それから何時間経過しただろうか。少女は自分を呼ぶ声を聞き、ゆっくりと目を覚ました。搜索隊に担がれ、少女は森から抜け出ていく。

少女は回想した。小一時間ケンムンと語り合った。

その後のことを少女は憶えていなかった。会話の途中で眠ってしまったからである。

（あれは夢だったのかな？）

彼女は不意にそう思った。その時、首にぶら下げていたカメラが視界に入り、電源を入れる。夢か現実かはすぐに判明した。

モニターにはあのガジュマルが映っていた。

それから一か月後、少女は見事コンテストで賞を獲得した。多くの人々が「あの写真をどこで撮ったのか」と訊ねたが、少女ははぐらかして決して答えることはなかった。